

小学校初任者の授業力向上に向けた研究

— ハンドブックの作成と研修講座内容の改善を通して —

三 堀 仁¹

教職員の授業力の向上のためには研修機会の充実が必要不可欠である。そこで、神奈川県立総合教育センターが実施している「初任者研修講座授業力向上小学校」において受講者のニーズを把握し、それに対応した『小学校初任教師のための授業づくりハンドブック』を作成するとともに、研修講座の内容等の改善を行った。研修では、具体的な資料を使った演習が受講者のニーズにこたえる有効な手立ての一つであることが分かった。

はじめに

平成20年1月に出された中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の答申で、「生きる力」をはぐくむという理念がますます重要になっていることが示された。同年3月に告示された新しい小学校学習指導要領においてもこの理念は重視されている。

学習指導要領改訂のポイントとしては、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」などが挙げられる。これらは、教育基本法の改正や学校教育法の一部改正などを踏まえたものであり、重要な意味を持つものである。「授業」の充実なしには実現できないものと言えるであろう。

神奈川県では、平成19年8月に「かながわ教育ビジョン」を策定し、「未来を拓(ひら)く・創る・生きる 人間力あふれる かながわの人づくり」を基本理念に、本県の教育の推進に取り組んでいる。その中の重点的な取組の一つに「意欲と指導力のある教職員の確保・育成」がある。「かながわの教育の質を高め、県民の揺るぎない信頼を確立するため、優秀な人材を確保し、指導力の高い教職員を育成」することが急務となっている。ベテラン教職員の大量退職と新たに採用する教職員の増加という状況の中、教職員の授業力の向上が求められているのである。

研究の目的

神奈川県立総合教育センター(以下「センター」という。)では、「かながわ教育ビジョン」を受けて県教育委員会が策定した「教職員人材確保・育成基本計画」に基づいて、人格的資質・課題解決力・授業力の向上を目指して研修を実施している。例えば初任者研修は、「学習指導や学級経営に必要な基礎的・基本的な知識や技能を習得し、組織の一員としての意識を高める」ことを目的として実施している。

本研究は「学習指導の基礎・基本(指導技術)に関する研究」として、小学校初任者の授業力向上を図るために、ハンドブックの作成と研修講座の内容等の改善に取り組んだものである。

研究の内容

1 初任者研修受講者の持つ課題の把握

センターでは、これまでも講義や演習など多様な形態で研修を行ってきた。本研究では、さらに受講者のニーズに合った研修にするため、初任者が授業の中で困難を感じている指導事項についての情報を収集し、整理した。

(1) 情報収集の方法

平成20年度の小学校初任者研修講座の1日目(5~6月に実施)において、「授業づくりで大切なこと」について話し合うグループ協議を行った。その際、協議メモとして、受講者364名に「現在、授業づくりで難しいと感じていること」を、一人4~5枚、カードに書いてもらった。研究の趣旨を説明し、任意でカードを提出の協力をお願いしたところ、多くの受講者の協力を得ることができた。

(2) 収集した情報の整理

受講者の了解を得て回収したカード1260枚を、同じ趣旨のものを集めて整理したところ、数の多い10項目は次ページの①から⑩のとおりであった。

また、これを図式化すると第1図のように示すことができた。例えば、「授業の進度が遅い」という項目は20枚のカードをまとめたものであるが、1枚1枚を具体的に見ると、「ゆっくりていねいに授業をすると全体的に遅れてしまう」「指導計画を立てても予定通りに進まない」「課題解決に時間が掛かり、結果として遅れてしまう」といった記述が見られる。「進度が遅い」結果となった原因としては、時間配分の問題であったり年間の見通しの問題でもあったりするので、記述内容から関連していると判断できるものは、項目同士を線で結んだ。

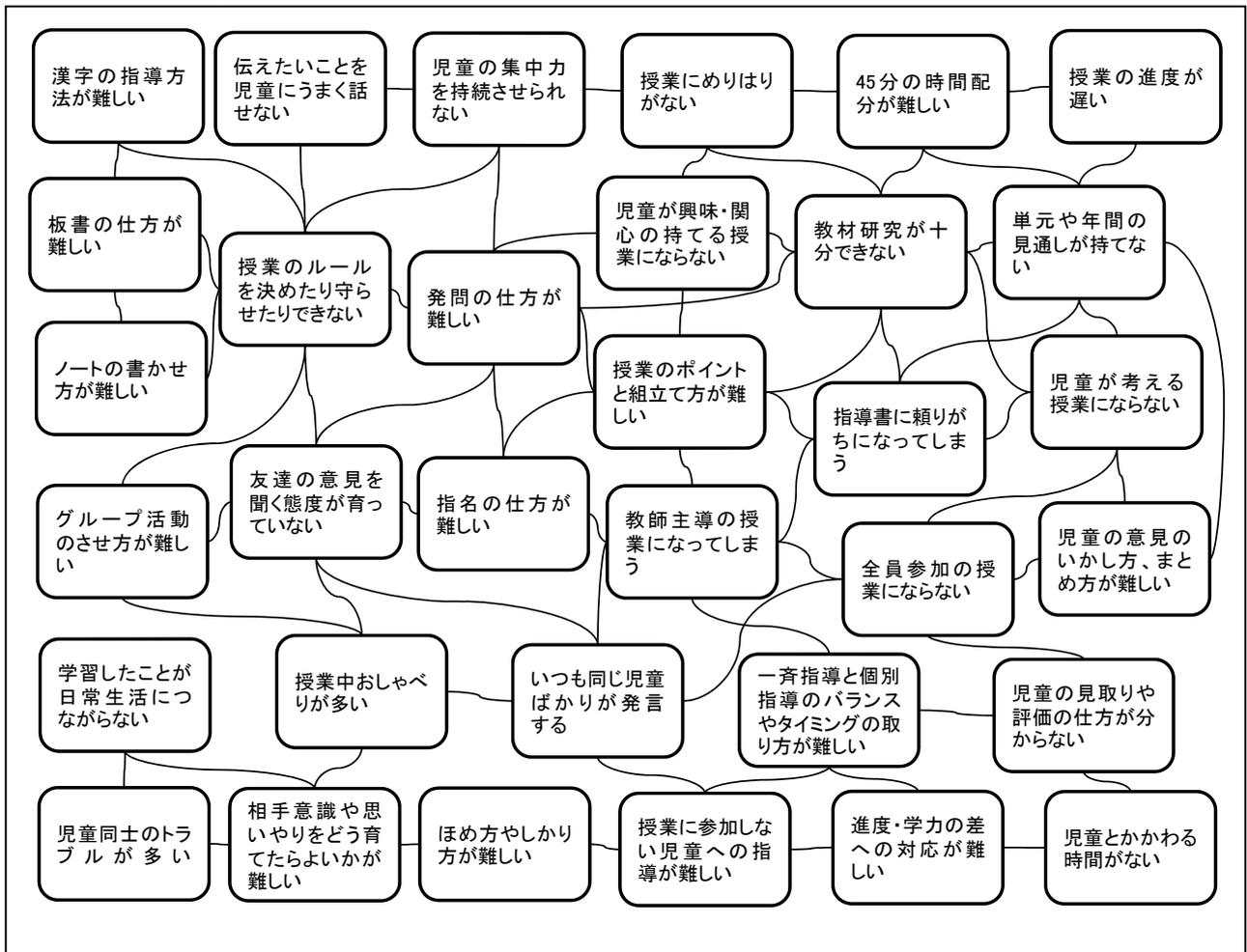
1 カリキュラム支援課 指導主事

〔収集したカードの主な記述内容〕

授業づくりで困難を感じている主な事項（括弧内数字は収集したカードの枚数）は以下のとおりである。

- ① 授業に参加しない児童への指導が難しい (218)
 - ・ 学習意欲のない児童
 - ・ 集中できない児童
 - ・ 他の児童に迷惑を掛けてしまう児童
- ② 進度・学力の差への対応が難しい (132)
 - ・ 進度の速い児童と遅い児童の差が大きい
 - ・ 課題が速く終わった児童への対応
 - ・ 学習が遅れてしまう児童への対応
- ③ 教材研究が十分できない (130)
 - ・ 時間がとれない
 - ・ どのようにすればよいのかが分からない
- ④ 発問の仕方が難しい (80)
 - ・ 児童の考えを引き出す発問
 - ・ 児童の思考を深めたり広げたりする発問
 - ・ 端的に分かりやすい発問
 - ・ ねらいに合った発問
- ⑤ 授業のルールを決めたり守らせたりすることができない (66)
 - ・ 話し方や聞き方のルール
 - ・ 時間の守らせ方

- ⑥ いつも同じ児童ばかりが発言する (63)
 - ・ 挙手する児童が決まってしまっている
 - ・ 授業中なかなか手が挙がらない
 - ・ 自信がなく手を挙げられない児童がいる
- ⑦ 板書の仕方が難しい (56)
 - ・ ポイントをまとめて書くのが難しい
 - ・ 書くのに時間が掛かってしまう
 - ・ 板書計画が十分できていない
- ⑧ 児童の意見のいかし方、まとめ方が難しい (55)
 - ・ 教師の意図する方向とのずれがある
 - ・ 多様な意見をまとめきれない
 - ・ 想定外の意見に戸惑う
 - ・ つぶやきをうまく拾えない
 - ・ 児童の意見が繋がらない
- ⑨ 児童が興味・関心を持てる授業にならない (42)
 - ・ 児童を引きつけられない
 - ・ 導入の仕方が難しい
 - ・ 学習に興味・関心を持たせることができない
- ⑩ ノートの書かせ方が難しい (39)
 - ・ ノートに何をどのように書かせるか
 - ・ ノートにどのくらいの分量を書かせるか



第1図 「授業づくり」で難しいと感じていること

(3) 考察

初任者が授業づくりで困難を感じていることで、一番目に多かったのが、授業に参加しない児童への指導が難しいということであり、次いで進度・学力の差への対応の問題であった。学習指導の基盤である児童理解の大切さと難しさが浮き彫りにされている。

注目すべきは、教材研究が十分できていないという項目である。日々の多忙さから時間が十分にとれないことも理由の一つにあるが、「どのようにすればよいのが分からない」という言葉にもあるように、教材研究の方法に戸惑いを感じていることが分かる。また、授業のポイントと組み立て方が難しい、児童が興味・関心を持つ授業にならない、授業にめりはりが無い、単元や年間の見通しが持てない、45分の時間配分が難しい、児童が考える授業にならない、指導書に頼りがちになってしまう、発問の仕方が難しい、などの関連項目が最も多いことも特徴として挙げられる。

このほか回収したカードで多かった項目は、学習のルール、板書の仕方、ノート指導といった指導技術的なものであった。しかし、単なる技術的なものではなく、学習のルールなどは学級経営に直結している事柄であり、また、板書の仕方やノート指導の工夫などは教材研究ができていないことが前提となる。

このように、受講者は授業という枠の中だけでもこれだけ多様な課題や悩みを抱えていることが分かる。

2 ハンドブックの作成と研修講座の内容等の改善

初任者の「授業づくりで難しいと感じていること」に対応するために、本研究では次の2点に取り組んだ。
・『小学校初任教師のための授業づくりハンドブック』の作成

・第2回以降の授業力向上（必修）研修講座の研修内容・方法の検討

研究を進めるに当たっては、この両者を関連付けて考えるようにした。例えば、研修講座で有効であった資料等はハンドブックに反映させた。

(1) ハンドブックの作成

収集したカードを整理すると、授業づくりにおける初任者研修受講者のニーズは、大きく分けて、

- ①授業づくりの土台となる学級づくりに関すること
- ②授業の計画や実施、評価に関すること

の二つにまとめることができる。

さらに整理してみると、①については、受講者は学級づくりと関連させた児童理解の仕方、学級のルールづくりとその指導などに困難さを感じていることが分かる。また、②については、指導技術はもとより、授業の計画・実施・評価のそれぞれの段階、すなわち、教材研究、授業構想、授業展開、授業改善において、どのように取り組んだらよいかについて困難さを感じていることが分かる。

このような状況を踏まえ、ハンドブックの構成は次のようにした。

○「授業づくり」と学級経営

「居心地のよい学級づくり」「児童理解と学級づくり」「学級のルールづくり」

○「授業づくり」の取組

「教材研究」「授業構想」「授業展開」「授業改善」「指導技術」

なお、このハンドブックは、マニュアルとして示すものではなく、このような方法も考えられるという、いわば実践的参考資料集である。

ハンドブックは、平成21年4月以降に神奈川県内の各小学校（政令指定・中核都市を除く）に配付するとともに、センターのWebページからダウンロードできるようにする予定である。詳細については、そちらを参照されたい。

(2) 研修講座の研修内容・方法の検討

第2回以降の授業力向上（必修）研修講座の研修内容・方法の検討について、具体例を挙げて述べることとする。

ここでは、第2回の研修内容を取り上げる。シラバスに示した研修内容は「わかる授業づくりの工夫」である。

当日は1日の日程で、講義と演習を行った。講義は「授業づくりで難しいと感じていること」を反映させつつ「学力の三要素」に即した内容とした。

本稿では、受講者が主体的にかかわることのできる演習に焦点を当てて、その実際を述べることとする。

従来は「わかる授業づくり」で大切だと感じることをグループで出し合って共有するというような、やや漠然とした内容であった。今回は「教材研究が十分できない」という受講者の状況を踏まえ、具体的な資料を使って検討する教材研究の時間とした。

ここで特に重視した点は、教材研究を「どのようにすればよいのが分からない」という声を受けて、教材研究の方法を身に付けてもらうということである。受講者が時間を十分にとって多角的に教材を見ることができるよう配慮し、次のような演習を行った。

まず、グループの人数を4名とし、全員が話しやすい形をつくった。時間は150分と、昨年度よりも65分多く確保した。さらに、資料を十分に検討できるように、課題とする資料も二つに絞った。また、資料は受講者が多様な考えを出すことができるものを選び、教材研究の際の具体的な視点も与えた。

今回は、課題として国語と社会の資料を出したが、ここでは社会の課題を紹介する。

〔グループ協議の協議資料〕

◇協議のテーマ：思考を深めるための資料の教材化

◇扱う単元：5年社会「果物づくりのさかんな地域」

◇設定する小単元の目標

